

第2章 勉学態度

1.勉学態度

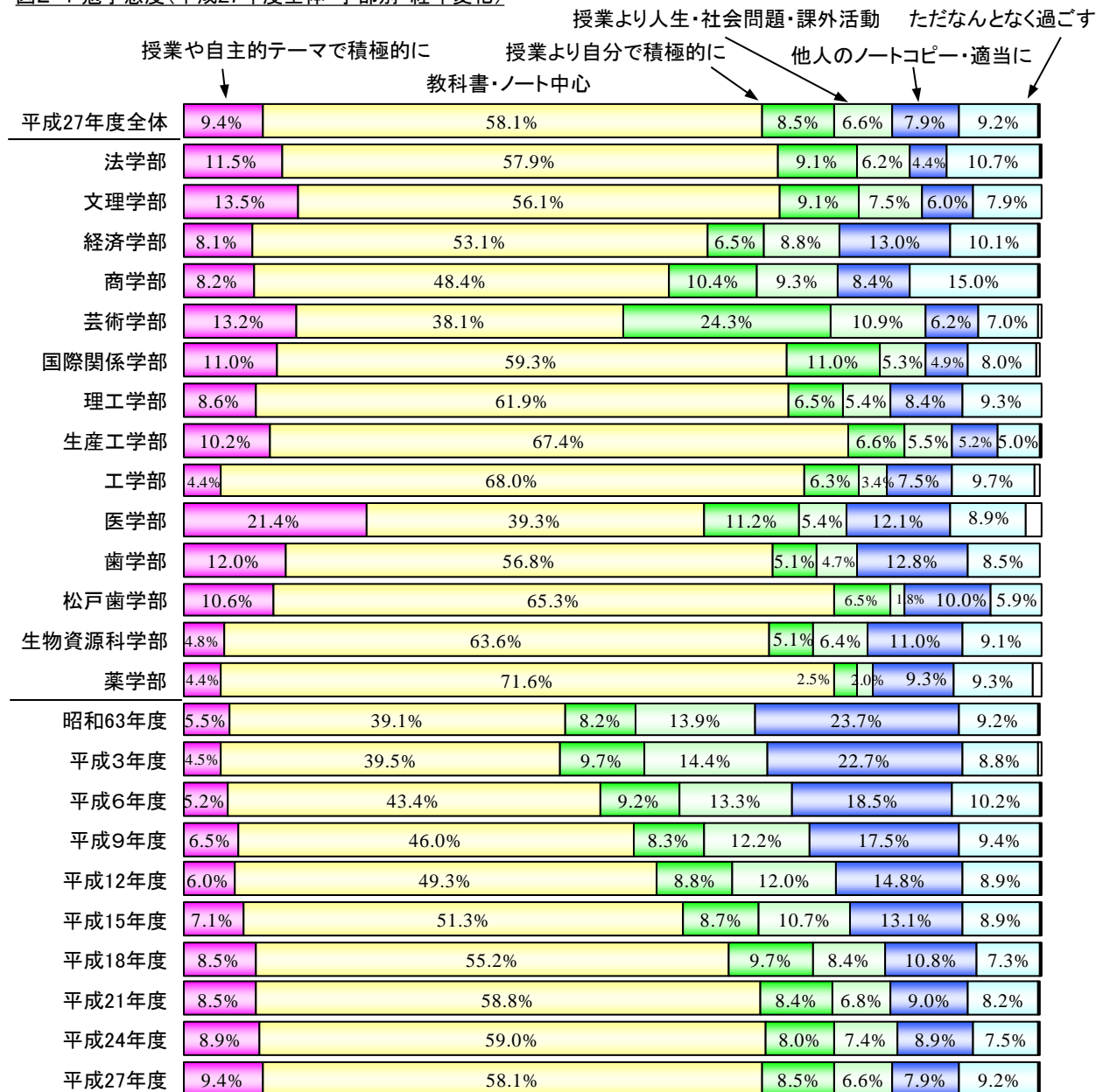
「教科書・ノートを中心に必要単位を修得」している学生が58.1%。
勉学に積極的に取り組む学生の増加が、第1回調査（27年前）から継続。

勉学態度を見ると、「教科書・ノートを中心に必要単位を修得」している学生が全体の58.1%で、各学部ともこの勉学態度が最も多くなっています。

医学部は「授業や自主的テーマで積極的に勉学」（21.4%）、芸術学部は「授業より自分で積極的にテーマに取り組み勉学」（24.3%）が他の学部より比率が高く、3年前よりその傾向が強まっています。

経年変化を見ると、「教科書・ノート中心」は平成21年度から横這いですが、「授業や自主的テーマで積極的に勉学」が平成12年度から漸増傾向、また「他人のノートのコピーで適当にすませている」の減少傾向が第1回調査（27年前）から継続しており、積極的な勉学態度の学生が増加し続けていることが分かります。

図2-1 勉学態度(平成27年度全体・学部別・経年変化)



2.学部別 勉学態度の向上率

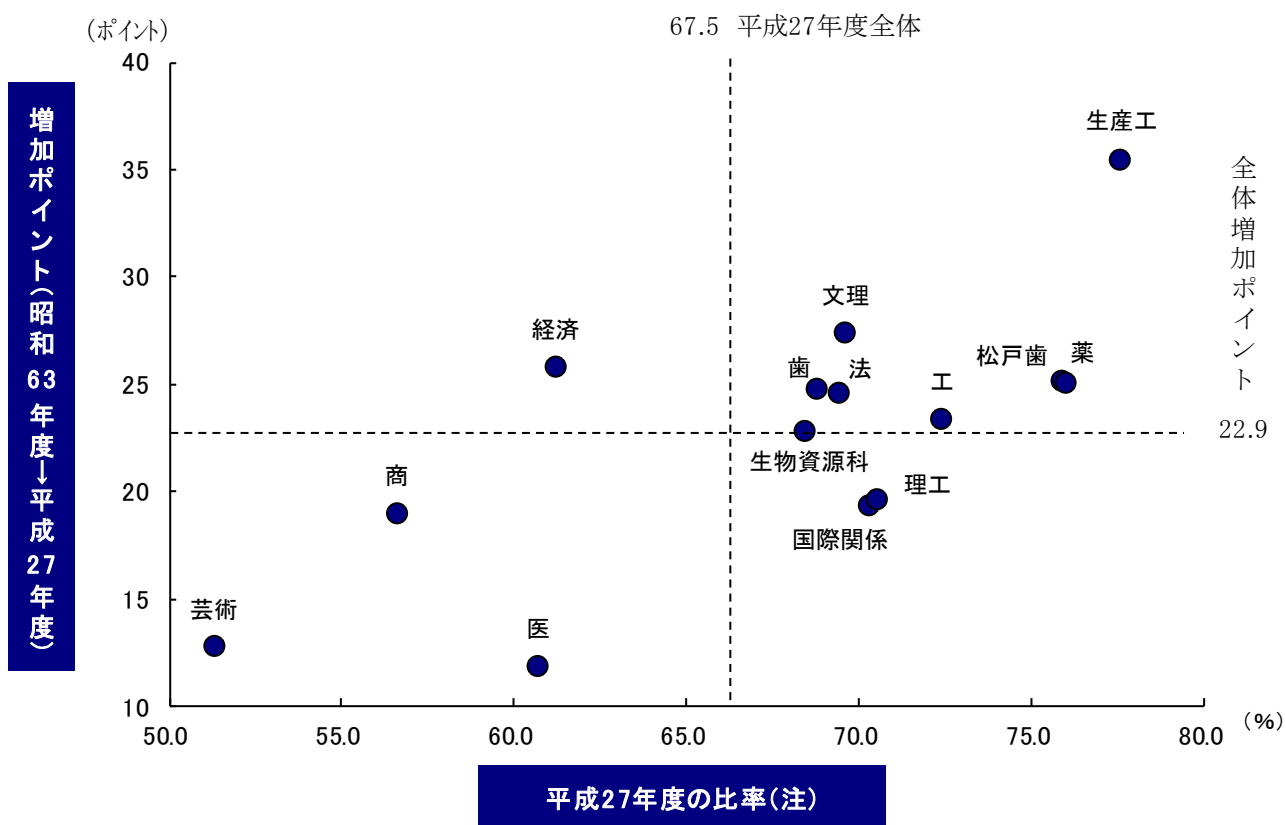
27年前に比べ勉学態度が大幅に向上し、まじめな学習態度の学生比率が高い学部は生産工学部、さらに松戸歯学部・薬学部。3年前と比べると歯学部で増加が目立つ。

「教科書・ノートを中心に必要単位を修得」に「授業や自主的テーマで積極的に勉学」を加えた『比較的まじめな勉学態度』が、第1回調査時（27年前の昭和63年度）に比べてどのくらい増加したのかを学部別に見たものが下図です。縦軸が増加ポイント、横軸が平成27年度の比率を示しています。この図を見ると、全ての学部で10ポイント以上増加しており、勉学態度が向上していることが分かります。最も増加ポイントが高かった学部は生産工学部で（35.5ポイント増）、平成27年度も77.6%と高くなっています。

同様に昭和63年度から27年間の増加ポイントが高く、今回調査（平成27年度）も比較的まじめな勉学態度の学生の比率が高い学部は、松戸歯学部・薬学部です。対照的に、増加ポイントが相対的に低く、今回調査も比較的まじめな勉学態度の学生の比率が低めだった学部は、医学部・芸術学部・商学部でした。

また、3年前と比較すると、歯学部で比較的まじめな勉学態度が61.3%から68.8%と7.5ポイント増加しており、少人数によるチュートリアル形式の教育などの成果が表れているものと思われます。

図2-2 比較的まじめな勉学態度の向上率(昭和63年度→平成27年度・学部別)



(注) 「授業や自主的テーマで積極的に勉学」と「教科書・ノートを中心に必要単位を修得」の%の合計

3.学部別 勉学態度の経年変化

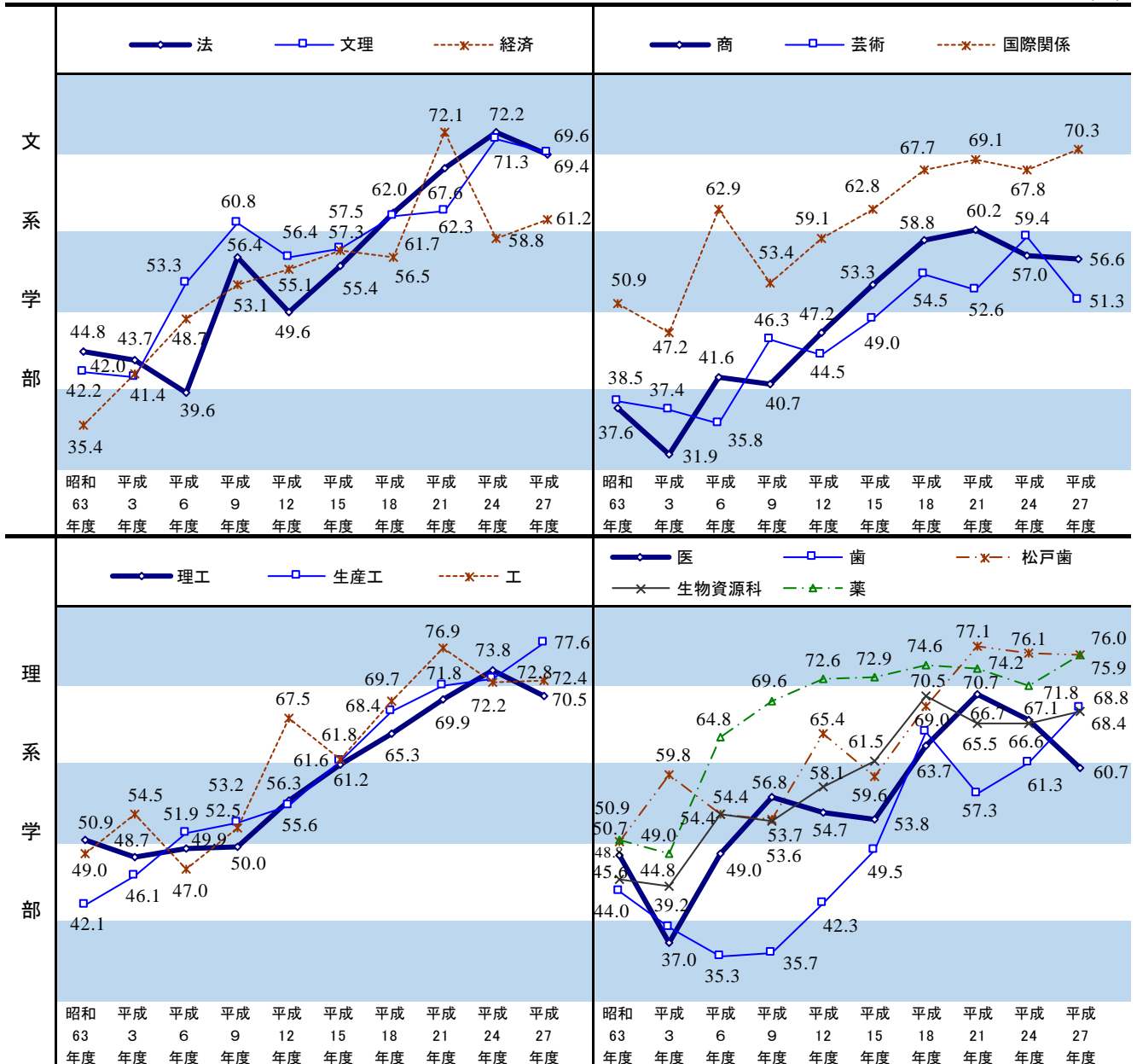
学部により、向上時期と期間に差異。生産工学部は昭和63年度から年々向上。

前ページで考察した比較的まじめな勉学態度（「教科書・ノートを中心に必要単位を修得」に「授業や自主的テーマで積極的に勉学」を加えた比率）の経年変化を学部別に見たものが下図です。

全学部で概ね右肩上がりの向上傾向を示していますが、学部により向上時期と期間に差異が見られます。例えば経済学部では平成18年度から平成21年度の3年間に56.5%から72.1%と15.6ポイント増、同様に工学部は平成12年度、法学部は平成9年度、国際関係学部と薬学部は平成6年度にそれぞれ3年前より15ポイント以上増加しています。一方、生産工学部では昭和63年度から年々増加し27年間で35.5ポイント増、商学部では平成3年度から平成21年度の18年間で28.3ポイント増、歯学部では平成9年度から平成18年度の9年間で29.8ポイント増と長期間で大幅な伸びが見られます。時期や期間は異なっていますが、各学部とも、教育改革の取り組みなどに伴って、学生の勉学態度が大きく向上していることがうかがえます。

図2-3 比較的まじめな勉学態度の経年変化（学部別）

(%)



(注) 「授業や自主的テーマで積極的に勉学」と「教科書・ノートを中心に必要単位を取得」の%の合計

4.授業態度

保健・体育科目や専門科目（必修及び必修以外）に熱心な学生が60%超。
 専門科目は12年前から熱心な学生の比率が増加傾向。

総合教育（一般・基礎）科目の授業について本学学生全体の授業態度を見ると、「授業に関心があり熱心だった」が15.8%、「まあまあ熱心に聞いていた」が43.0%となっており、両者を加えると58.8%の学生が熱心な態度で受けているとしています。「試験が不安だから聞いていた」「出席をとるから義務感で出ていた」といった「義務的」態度の学生は32.0%、「ほとんど聞いていなかった」「他のことをやっていた」など「無関心」層は9.2%でした。

「熱心」と「まあ熱心」を加えた比率を見ると、保健・体育科目の授業が67.9%で最も高く、次いで専門科目の必修授業（66.0%）、専門科目の必修以外の授業（62.6%）の順で高くなっています。外国語科目は「義務的」態度が38.0%と高くなっています。平成15年度から経年変化を見ると、各科目とも概ね右肩上がりの傾向となっています。専門科目（必修及び必修以外）は平成15年度から、外国語科目は平成18年度から年々漸増しており、学生の授業態度の向上がうかがえます。

図2-4-1 科目別授業態度(平成27年度全体)

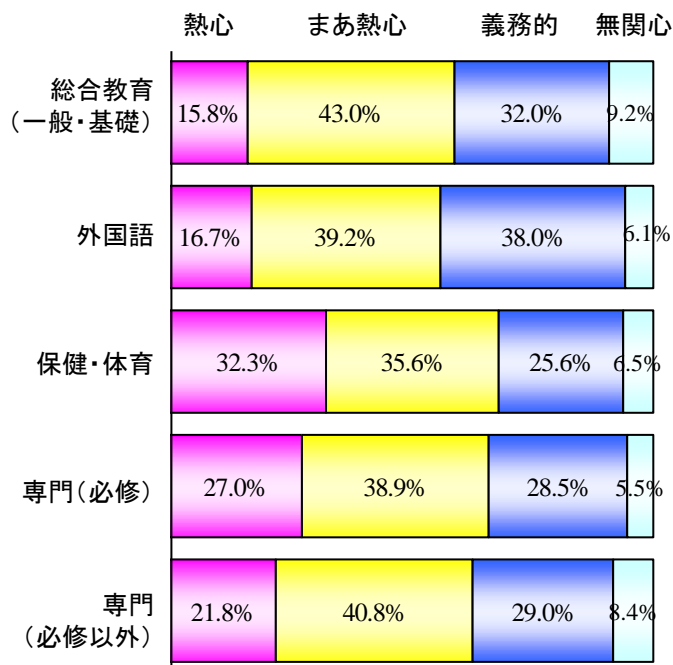
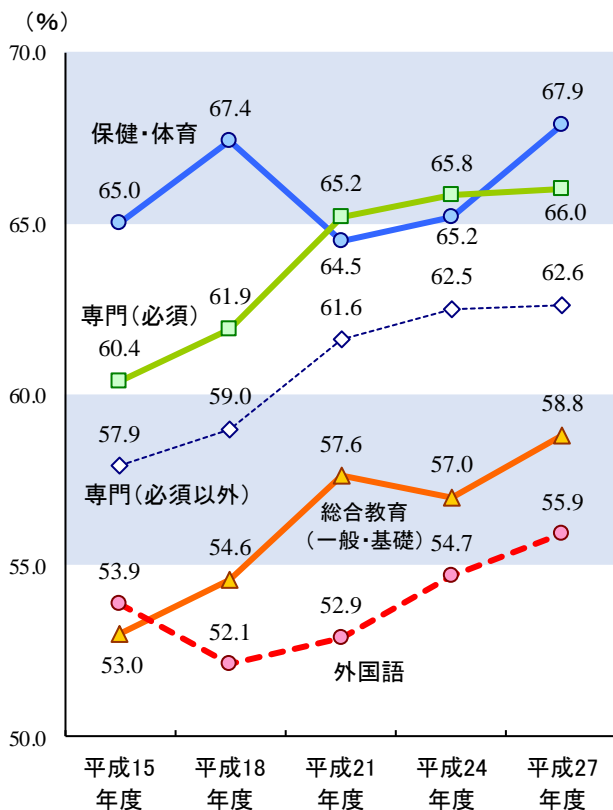


図2-4-2 「熱心」+「まあ熱心」の科目別経年変化(全体)



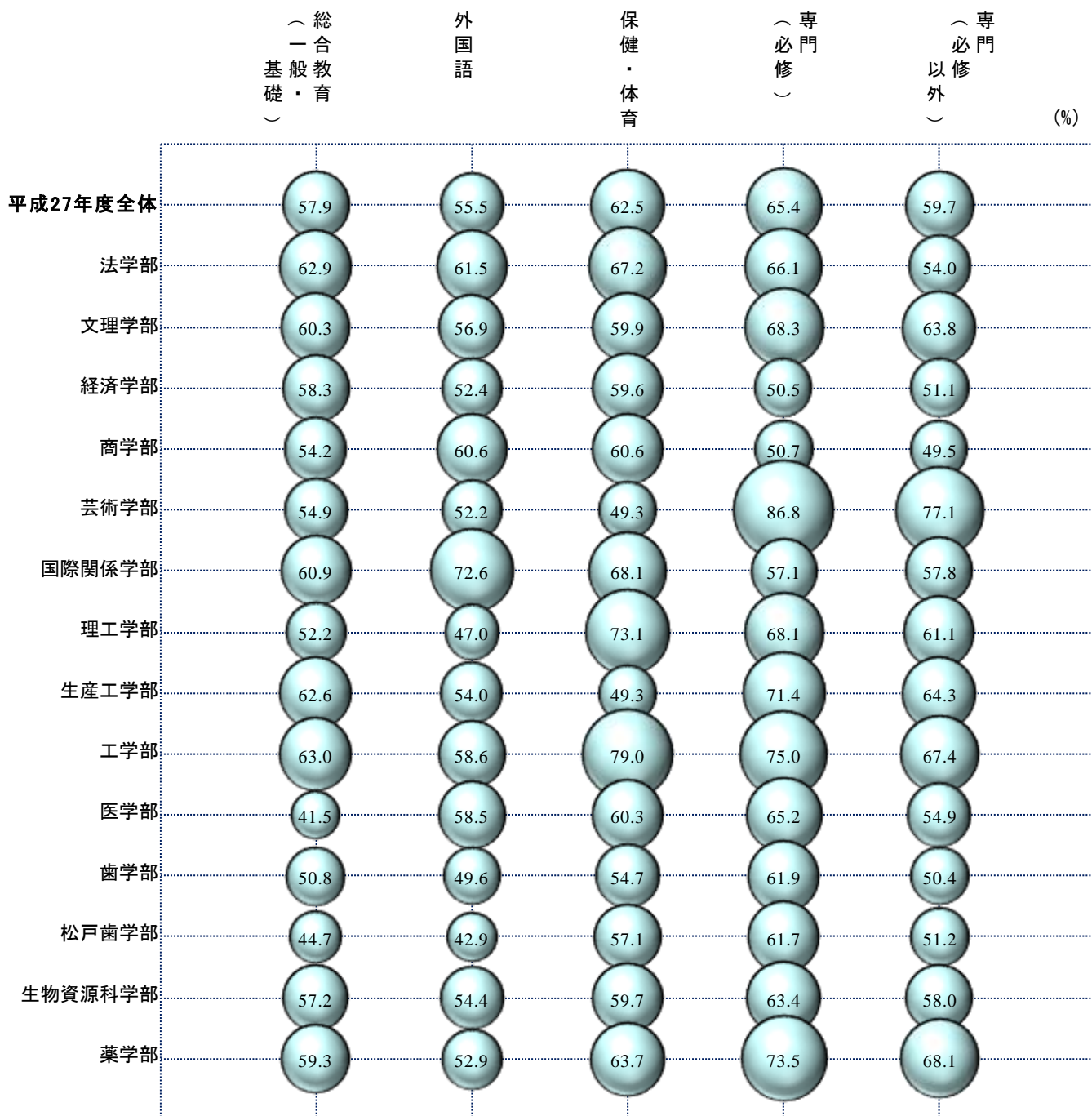
(注) 「義務的」は「試験が不安」「出席をとるから」の合計、「無関心」はそれ以外の合計
 「受講していないので答えられない」と無回答を母数から減じて%を算出

5.学部別 授業態度

熱心な科目は、芸術学部では専門、国際関係学部では外国語、工学部・薬学部・生産工学部では専門（必修）。

授業態度について「熱心」と「まあ熱心」を加えた比率を学部別に見ると、芸術学部では専門（必修）が86.8%，専門（必修以外）が79.5%と専門科目に対する熱心度が強い点が目立っています。また、国際関係学部では外国語（73.5%），工学部・薬学部・生産工学部では専門（必修）が70%台と高くなっています。医歯系学部では、総合教育が低い傾向が見られます。

図2-5 科目別授業態度（「熱心」+「まあ熱心」の平成27年度全体・学部別）



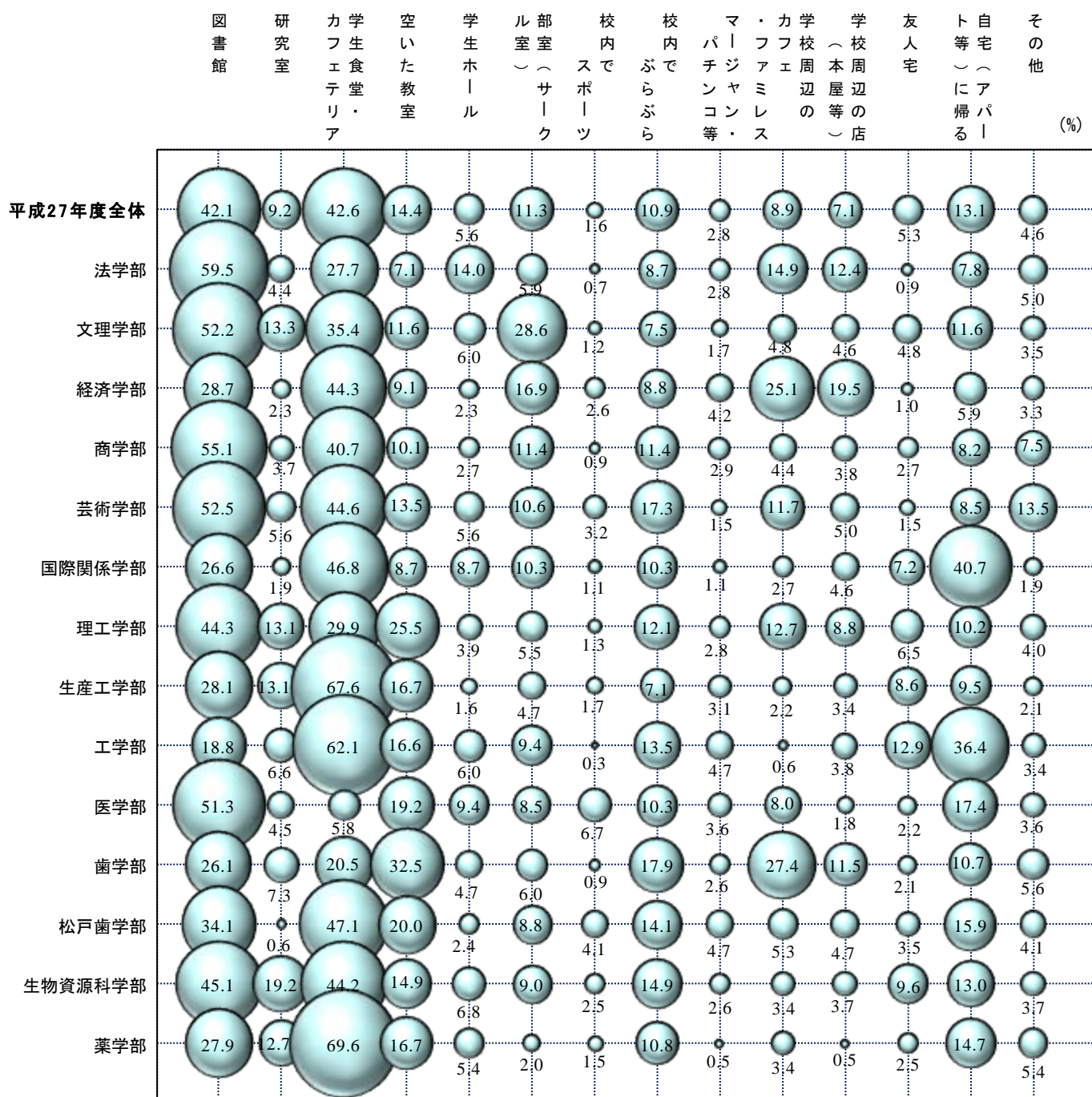
（注） 「受講していないので答えられない」と無回答を母数から減じて%を算出

6. 空き時間を過ごす場所

空き時間を過ごす場所は、「学生食堂・カフェテリア」と「図書館」が双璧。
学部内の施設やキャンパス周辺の環境により空き時間を過ごす場所に差異。

学内で空き時間ができた場合に過ごす場所を見ると、「学生食堂・カフェテリア」と「図書館」が42%強で双璧となっています。キャンパスが首都圏外にある薬学部・生産工学部・工学部・松戸歯学部・国際関係部では「学生食堂・カフェテリア」が最も高くなっています。国際関係部と工学部では「自宅（アパート等）に帰る」も40%前後となっています。一方、法学部・医学部・芸術学部・文理学部では「図書館」がトップとなっています。但し、都内にある経済学部では「学生食堂・カフェテリア」で過ごすのが高くなっています。キャンパス周辺の環境や学部内の施設の充実度等によって、空き時間を過ごす場所に差異が見られるようです。

図2-6 空き時間を過ごす場所(平成27年度全体・学部別)



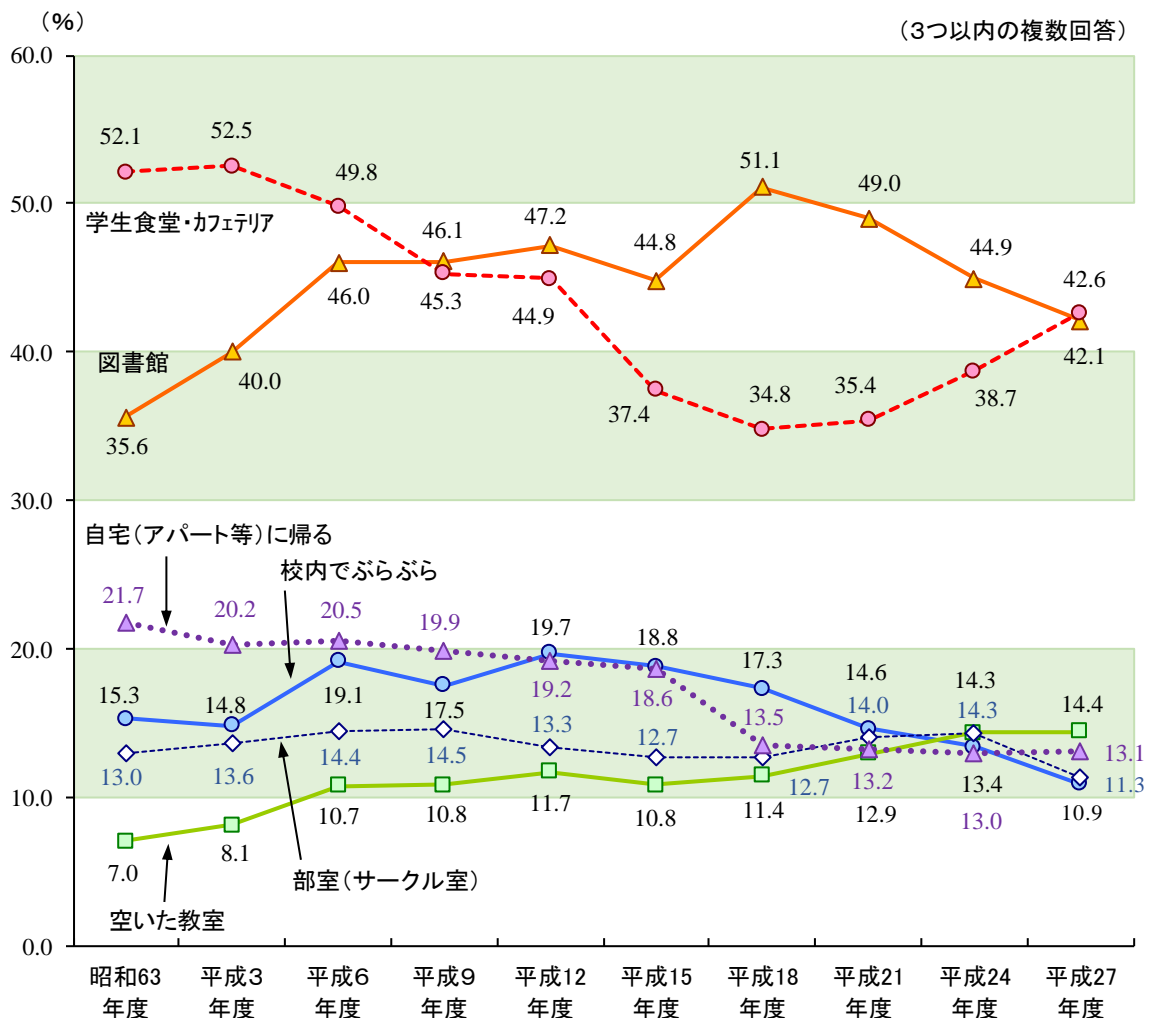
7. 空き時間を過ごす場所—今回上位6項目の経年変化

空き時間を過ごす場所は9年前から「学生食堂・カフェテリア」が増加、「図書館」が減少傾向。施設のリニューアルが影響か？

学内で空き時間ができた場合の過ごす場所のうち上位6項目までの経年変化を見ると、「図書館」が昭和63年度の35.6%から増加傾向にあり平成18年度には51.1%に達していましたが、平成21年度から減少に転じ、平成27年度は42.6%と9年間で9.0ポイント減少しています。法学部と文理学部では図書館のリニューアルにより平成18年に3年前より20ポイント以上増加しましたが、平成27年度は3年前より10ポイント以上減少し、リニューアル効果が薄れたようです。

一方、「学生食堂・カフェテリア」は平成3年度の52.5%から平成18年度までの15年間で17.7ポイントも減少していましたが、その後増加に転じ、平成27年度は「図書館」を僅かに上回っています。薬学部で学生ホールやインターネットを併設した学生食堂が完成したことにより平成21年度に71.6%と3年前比35.4ポイント増、商学部でも同年の新1・2号館竣工により平成24年度に48.7%と3年前比21.9ポイント増と、両学部でアメニティーの場が充実したことが影響しているものと考えられます。また、医学部では、平成18年度から平成27年度の9年間に、「学生食堂・カフェテリア」は9.2ポイント減、「学生ホール」が22.0ポイント減、「校内でぶらぶら」が11.0ポイント減、一方で「図書館」が16.5ポイント増となっており、学生の行動がより勉学に向かっているようです。

図2-7 空き時間を過ごす場所(平成27年度上位6項目の経年変化・全体)



8. 空き時間を過ごす友達の数

空き時間を主に1人で過ごす学生が35.7%。学部により差。
キャンパスで一緒に過ごす友達の数は、平成18年度以降横這い。

学内で空き時間ができた時に過ごす友達の数を全体で見ると、「主に1人」が35.7%となっています。一方、「2人」が23.0%、「3人」が16.5%、「4人以上」が23.6%と、友達と共に過ごすことの多い学生は合計で63.1%となります。法学部では1人で過ごす学生の比率がほぼ半数（49.7%）と高くなっています。薬学部と生産工学部では「4人以上」と多人数で過ごす学生が40%前後と高くなっています。

経年変化を見ると、1人で過ごす学生の比率は昭和63年度から平成18年度の18年間に17.1ポイント増加しましたが、その後の9年間は微増傾向となっています。一方、4人以上は昭和63年から18年間に18.6ポイント減少しましたが、平成27年度は平成18年度とほぼ同じ水準に落ち着いています。空き時間を一緒に過ごす友達の数は、平成18年度以降横這い傾向にあるようです。

図2-8 空き時間を過ごす人数(平成27年度全体・学部別・経年変化)

	主に1人	友達と2人	友達と3人	4人以上
平成27年度全体	35.7%	23.0%	16.5%	23.6%
法学部	49.7%	25.2%	11.7%	12.4%
文理学部	34.2%	29.8%	16.8%	18.8%
経済学部	45.6%	23.8%	11.7%	16.6%
商学部	43.4%	27.8%	14.5%	12.5%
芸術学部	42.2%	22.0%	12.6%	21.4%
国際関係学部	41.1%	34.6%	13.7%	9.5%
理工学部	26.3%	19.5%	20.4%	33.0%
生産工学部	21.7%	18.8%	20.2%	38.6%
工学部	30.1%	15.4%	18.2%	34.8%
医学部	43.3%	18.8%	17.0%	19.2%
歯学部	32.1%	20.5%	23.9%	22.6%
松戸歯学部	34.1%	27.6%	13.5%	23.5%
生物資源科学部	34.0%	17.8%	20.2%	26.7%
薬学部	19.6%	18.6%	19.1%	41.7%
昭和63年度	17.3%	17.2%	21.0%	41.8%
平成3年度	19.6%	17.8%	19.1%	41.1%
平成6年度	23.8%	18.8%	18.9%	38.0%
平成9年度	28.0%	19.3%	20.0%	32.2%
平成12年度	29.1%	22.4%	20.4%	27.6%
平成15年度	32.3%	21.8%	18.9%	25.9%
平成18年度	34.4%	23.4%	17.7%	23.2%
平成21年度	35.0%	21.4%	16.5%	26.2%
平成24年度	34.6%	20.4%	16.4%	27.5%
平成27年度	35.7%	23.0%	16.5%	23.6%